

(73)

あれからもう一年。今でも忘れる事のできない昨年の六月下旬、あの頃は毎日悪天候が続いていた。学校でも部活ごとに帰らせまくれたので、私達は喜んで帰って来た。帰宅してから、この事も知らずに……。

5. 水害と高校受験

赤穂高校一年

C・Y

騒ぎ出したのは夕方頃からだ。鐘は鳴り、有線はしきりに怒鳴る。そのうちにお宮が崩れまじった。ぞれに引き續き、すごい音で人家がつぶれまじりました。ぞれから数分後、私の家へ近くの人が避難して来ました。でも電気は切れ、有線も切れ、ただ朝を待つばかりとなつてしまいました。

私達はみんなぞ一つ所に集まつていましたが、大人の人か、

「ここへ崩れてくりやあ、皆が一緒に死ぬんだぞいい。」と言ひ出しました。そのうちに、けたたましい雨の音と共に、石のごとごとと流れる音、岩が崩れる音とが入り混つて、私達をいつぞう不安にしました。

「もう皆手をつなげ。死ぬ時は一緒だから。」

と言う大人の人々の声に私達子供は、

「まだ死ぬのはいやだ。」と言ひながら暗黒の中ぞ泣いていました。

長い恐ろしい一夜が明け始めたころぞすごい音がしました。皆が悲鳴をあげ、あわただしく戸をあけると、腰も抜かさぬばかりに目の前に大木や家の屋根なんかがあつとんで来ているんです。私の家も危ないと言うのですぐ逃げました。でも皆どのようにして逃げたか、山崩れがした所と、今にも氾濫しぞうな川を沿つて行った時には、生きた気持ちはありませんでした。今考えみると、よくあんな所が通れたと感心するほどの所です。

ぞれから四、五日親類の家へ行つていました。家に帰つてからも雨の降るたびに逃げ回りました。

水田も半分以上流されてしまい、私はもちろん進学はあきらめていました。

でも家の人はどうしても出してくれず、と言った時にはとて嬉しかったんです。それに私も行きかけたから……。でも皆ずっと勉強してゐるから、今からでは遅いと思つて行く気がしなくなりました。でも家の父、文通の友、又全園の友からののはげましの手紙に励まされ、苦しい困難を乗り越えたんです。母は毎晩夜食を運んでくれました。それに母が書いた詩を読んだんです。受験する子へ夜食を運び笑顔見まくる母の嬉しさ。——という詩を。私かもし落ちれば母がかゆいだろうと思つたんです。一番一生懸命になつてくれたんだから……。

入試発表の時には家の人は一時間ほど前からラジオに耳を傾けていました。私よりも落ちるつもりで他の部屋にいたんですが、
「うかった。トと言つた母が入つてきました。」

その時の顔を今でも忘れることができません。私に信じられず、
「うかった？」と聞き返すほどでした。

そして母と手を取り合い、飛び上がった喜びました。うかったことはありがたかつたんですが、これからの事を考えると暗い気持ちになるのです。

母は毎日、田舎しんどです。夕食の時など母の顔を見ると、小じわがふえたりやうです。それに、煮えた手。それに母を見た時、私には母がどれほど苦勞してゐるか、つうことをつくづく感じさせられ、又母への感謝の気持ちが一層深まりました。

(中川村中川西中学校卒業 三十七年)